学習者のコミュニケーション行動に対する母語話者の違和感
－ロールプレイにおけるモニタリングの分析を通して－

フォード丹羽順子[*1]・三宅　和子[*2]

A Study on “Unnaturalness” Felt by Native Japanese towards Learners’ Communication Behavior: Analysis of the Monitoring of Role Play Activities

Junko FORD-NIWA・Kazuko MIYAKE

要　旨

会話参加者が会話中に内省的に行っている、自己と会話相手の言語行動に関する評価や判断を「モニタリング」と名づけ、日本語学習者と日本人学生に対し依頼場面のロールプレイを実施し、双方から、モニタリングのデータをとった。その結果、日本人学生のモニタリングの中に、学習者のコミュニケーション行動に対して違和感を抱いたというコメントが観察された。

違和感を、言語的違和感、談話展開的違和感、語用論的違和感に分けて考察したところ、言語的違和感は、文法的間違いなどから生じており、間違いはあっても寛容に受け取られるが、談話展開的違和感は、相手の意図がうまく理解できずに会話がスムーズに進められない場合、言語的違和感の場合より、わかりにくさに対する評価がやや厳しくなっていた。そして、語用論的違和感については、日本語社会でとるべきコミュニケーション行動に関する規範に照らし合わせて、学習者のコミュニケーション行動にずれがみられると感じ、批判的な見方がなされることが明らかになった。

【キーワード】　依頼場面、モニタリング、言語的違和感、談話展開的違和感、語用論的違和感

１．はじめに

本研究では、日本語学習者と日本人学生による依頼場面のロールプレイを取り上げ、日本人学生がロールプレイを遂行する際に抱く学習者のコミュニケーション行動に対する違和感について考察する。

三宅・フォード丹羽（2014）、三宅（2014）では、会話参加者が会話中に内省的に行っている、自己と会話相手の言語行動に関する評価や判断を「モニタリング」と名づけた。そ

[*1]佐賀大学全学教育機構・責任著者　[*2]東洋大学文学部

して日本語学習者に対しロールプレイ（以下、RPと略す）を実施し、学習者が会話遂行時に行っているモニタリングについて考察した[1)]。これらの研究では、学習者のモニタリングのみを考察しているが、会話が２人のやりとりの中で成立する以上、RPのやりとりの中で会話相手によるさまざまな内省的な活動が行われているはずである。そこで本研究では、学習者にとって身近な状況と会話相手の設定を用意することとし、三宅・フォード丹羽（2014）、三宅（2014）の研究とはRPの内容を変え、日本人の友人にアルバイトのシフトを代わってもらう依頼場面とした。RP実施後にモニタリングのデータをとったところ、日本人学生が行ったモニタリングの中で、学習者の発話に対して違和感を抱いたというコメントが観察された。本研究では、この日本人学生が学習者のコミュニケーション行動に対して抱く、さまざまなレベルの違和感に焦点を当てて考察することにする。

２．先行研究

依頼場面の会話に関してはさまざまな研究がなされている。猪崎（2000a、2000b）は、依頼場面の会話における談話ストラテジーや談話展開に関する社会・文化的相違がコミュニケーション問題の原因となっている場合を考察している。また、徐（2006、2007）は、日本人および台湾人の母語場面と接触場面において、依頼会話の先行部および終結部における依頼行動を分析し、学習者がどのような表現を使用しているかを考察している。一方、学習者の発話の評価については、学習者のロールプレイの発話を母語話者に聞いてもらい、気づいたことや気になったことを話してもらう研究（小池2000）や、日本語教師と非日本語教師で、学習者の発話に対する評価の観点の違いについて考察した研究（崔2013）がある。

本研究はこれらの研究と、依頼場面の会話という側面と、学習者の発話の評価という側面において関心が重なる。しかし、これまで依頼場面の会話に関する研究では、猪崎（2000a、2000b）のように談話におけるストラテジーに焦点を当てたものや、徐（2006、2007）のように談話構造に注目したものが多かった。また、母語話者による学習者の評価に関する研究では、学習者の言語行動を音声やビデオで記録し、それを見て、後から母語話者が評価するという形をとることが多かった。本研究がこれらの研究と異なる点は、会話参加者である日本人学生が、会話相手である学習者とともにRPを遂行する中で、学習者のコミュニケーション行動に対して抱いた違和感を取り上げ、考察している点と、その考察に際して、言語的違和感、談話展開的違和感、語用論的違和感というコミュニケーションをめぐる異なるレベルの違和感を認めた点である。

日本に住む学習者が日常的に遭遇する接触場面では、日本語母語話者がOn-going（現在進行中）の会話の中で日本語学習者に対してモニタリングを行っているはずである。本研究は、RPの遂行を通して、その内容を探ろうとするものである。

３．研究の方法

３－１　実施内容

佐賀大学の日本語コースで学んでいる学習者８名に、それぞれが親しい日本人学生に声をかけてもらってペアを作り、RPを実施し録音した。RP実施日から１週間以内に、学習者と日本人学生に対し、個別に、モニタリングのフォローアップインタビュー（以下、FUIと略す）を行った。FUIでは、会話の文字化データを見せながら、録音した会話を聞いてもらい、発話ごとに、自らが話している時と相手の発話を聞いている時に、どのようなことを考えていたかを話してもらった。

RPは依頼場面のもので、ロールカードは、次のように設定されている。

学習者

あなたは来週、授業で発表することになっていますが、その準備がまだできていません。バイト先の同年齢の（同じころ働き始めた）日本人学生に「今週の土曜日のシフトを代わってほしい」と頼んでください。断られても、もう一度頼んでみてください。どうしても無理と言われたら、あきらめてください。

日本人学生

バイト先の同年齢の（同じころ働き始めた）留学生に「今週の土曜日のシフトを代わってほしい」と頼まれます。あなたは２週間後の発表の準備で忙しいので、まず断ってください。相手がさらに頼んできたら、引き受けるかどうかは自分で判断してください。

３－２　調査協力者

佐賀大学の日本語コース初中級クラス（日本語能力試験N３レベル）の学習者４名と、中級クラス（N２レベル）の学習者４名の合計８名と、それぞれが親しい日本人学生８名の計16名である。

依頼場面のRPであり、依頼する側も依頼される側も、会話相手の性別が談話展開に影響すると考え、調査協力者は同性どうし（女性）にした。

４．結果と考察

合計８ペアのRPのモニタリングの中から、日本人学生が学習者のコミュニケーション行動に対して違和感を抱いたという内容のコメントを抽出した。これらを詳しく見ていくと、大きく以下の３種類に分けられることがわかった。

「言語的違和感」
　文法、語彙、表現、発音など言語的な分野に関する違和感
「談話展開的違和感」
　談話の構成や談話のやりとり、展開のしかたに関する違和感
「語用論的違和感」
　文法的な間違いではないが、その場における語や表現の適切性に関する違和感

　以下、この順に内容を見ていく。

４－１　言語的違和感

　言語的違和感には、助詞の使い方に関するコメント、フィラーに関するコメント、表現に関するコメントがあった。（１）は、助詞の使い方に関して日本人学生がモニタリングした学習者の発話、［１］は日本人学生のモニタリング内容である。

（１）Ｓ：初中級学習者（台湾）
　　Ｓ２：あの、今週の土曜日は、時間がありますか。

［１］Ｓ２に対するモニタリング内容
　なんかあるのかなと思いました。「が」と「は」の使い方が日本語っぽくないなと思いました。でも、わかる。「今週の土曜日は、時間がありますか。」たぶん文法的におかしくないと思うんですけど、口語的なところでいうと、たぶん私がしゃべっているときは、土曜で切れて、「土曜、時間ある」みたいな、助詞を言わないことが多いので、なんかちょっと、あ、って思います。日本人同士だと助詞が全部抜けて、それでも理解できるんですけど。やっぱり、向こうの方が日本語学ぶことで、「が」と「は」をきちんと入れてる文章を文字じゃなくて、耳で聞くことで、あ、こんなふうになるんだ、と思って。正しい日本語だと思うんですけど、違和感が私はちょっとありました。Ｓがきちんと助詞を言ったのはおそらくそうやって学んでるからかなと思いました。

　日本人学生は、話しことばでは無助詞で話したほうがいいところで、学習者が助詞を入れて話していることに対して違和感を抱いている。
　次の（２）と（３）の学習者の発話に対する日本人学生のモニタリングでは、助詞がなかったり、間違っていたりすることに対する違和感が述べられている。

（２）Ｓ：初中級学習者（台湾）
　　Ｓ６：でも、私は来週、発表のこと、まだ準備でき、できなかったですけど。

［２］Ｓ６に対するモニタリング内容
助詞が抜けてて、来週の発表の準備ができてないことだと思うんですけど、来週か、みたいな。

（３）Ｓ：初中級学習者（台湾）
Ｓ７：うーん、バイトの、代わっていただけませんか。

［３］Ｓ７に対するモニタリング内容
ちょっと、「バイトの」の「の」はおかしいですけど、

次の（４）の発話に対しては、フィラーが多いことに関して［４］でモニタリングがなされている。

（４）Ｙ：中級学習者（インド）
Ｙ１：あ、あー、あー、あのー、Ａさん

［４］Ｙ１に対するモニタリング内容
Ｙさんはなんかいつも、けっこうはっきり始めないので、「えーっと」、「えーと」みたいな感じなので、いつもの感じだと思ってましたけど、これを見たらなんか、「あー、あー」っていうのが多いですね。「あのー」とか少し言うくらいならいいんですけど、でもこんなふうに「あーあーあー」って何回も続いたら不自然かなと思います。

次の（５）の発話に対しては、表現に関するモニタリングが行われている。

（５）Ｙ：中級学習者（インド）
Ｙ２：来週授業で、発表、発表があって、あ、う、アルバイトの、ア、アルバイトの時間は重なっています。

［５］Ｙ２に対するモニタリング内容
「アルバイトの時間は重なっています」って言い方が、ちょっと違和感を覚えました。なんか「アルバイトの時間が重なってる」って言い方をしたことがなかったので、そうですね、ちょっとパッと浮かばないですけど、これはなんか後で言ってあげたほうがいいのかなと思いました。日本語が違うなって。

以上のように、言語的違和感には、助詞の選択や省略、誤用などに関するものがあり、

それらに気づいて違和感があるというコメントをしているものの、厳しい評価を下してはいない。学習者だから間違えても仕方がないと容認したり、また後で指摘してあげようという配慮もなされている。学習者の誤用によって正確な意味がとりにくくなる場合もあったり、コミュニケーションに支障をきたす可能性があったりするのだが、十全な理解ができなくても、その場その場でとりあえずの解釈をしながら会話をすすめていこうとする態度が見られる。

４－２　談話展開的違和感

（６）から（８）の学習者の発話に対して、［６］から［８］は、談話の構成や展開に関する違和感を述べているものである。談話展開に関するモニタリングでは、相互のやりとりでの関連が問題になるので、日本人学生の発話を含めて提示する。

（６）Ｙ：中級学習者（インド）・Ａ：日本人学生
　Ａ３：授業の時間が重なってるんですか。
　Ｙ４：あー、いえ、準備はまだです。

［６］Ｙ４に対するモニタリング内容
なんか授業の時間が重なっているかどうか聞いているのに、準備はまだって言われて、ちょっと混乱したんですけど、話をつなげないといけないかなと思って、なんか受け入れました。なんかなんとなくその言葉の使い方とかに時々違和感があるので、私も理解するのに時間がかかりました。ちょっとＹさんの応答に違和感覚えました。

このモニタリングから、日本人学生は、自分が投げかけた問いに学習者がきちんと返答していないことに対して違和感を抱いていることがわかる。日本語自体に間違いがなくとも、展開上ちぐはぐに感じられることへの違和感である。
次の（７）では、学習者の説明のことばが足りずに分かりにくいことに対する違和感が述べられている。

（７）Ｙ：中級学習者（インド）・Ａ：日本人学生
　Ｙ４：あー、いえ、準備はまだです。
　Ａ４：あー、準備が、あー。
　Ｙ５：ちょっと時間かかると思います。

［７］Ｙ５に対するモニタリング内容
たとえば、私は発表をしなきゃいけなくてそのための準備に時間がかかるので、という

説明をされたらわかるんですけど、「ちょっと時間がかかる」っていうのは。

次の（８）では、当初学習者Ｆはバイトのシフトを代わってほしいという依頼をしていたにもかかわらず、Ｕ７で日本人学生が代わるのは難しいという感触を見せていることを認識した後、Ｆ９で突然、発表の準備を手伝ってほしいという依頼に変えてしまっている。そのため、日本人学生はＵ９で驚きを表明している。Ｆ９では「えーっと。なんだ、まだ、えーと、」などの言いよどみから、次のことばを探しているかのようにみえる。このときのモニタリングでＦは「もしシフトを代わることができないなら、Ｕさんに発表の準備をちょっと手伝ってもらいたかった。なぜそう考えたかはわからないが。」とコメントしている。しかし、このＦの発話からは、状況が難しいと判断して次の解決策を考えていることも、新たな提案を考えついて発言していることも分からず、日本人学生に唐突であると感じさせてしまっている。話題を転換することを合図する「それじゃ」などの談話標識が必要だったのである。

（８）Ｆ：初中級学習者（フランス）・Ｕ：日本人学生
　Ｕ７：うーん、あー、どうしようかな。けど、私も、発表がちょっとあるから。
　Ｆ８：あー、そうなんですか。
　Ｕ８：うん。
　Ｆ９：えーっと。なんだ、まだ、えーと、ちょっと準備するために手伝ってくれませんか。
　Ｕ９：あ、私が？

［８］Ｆ９に対するモニタリング内容
えっと、発表の準備を手伝ってほしいのかなと思って、意外な頼みだったから、ちょっとびっくりしました。

以上のように、談話展開的違和感においては、日本人学生は、話し方の順序や、やりとりがかみあっていないことについて違和感を持ったり、理解のしづらさを感じたりしている。言語的な間違いや誤用は比較的見つけやすく、会話相手である日本人学生が内省的に修正しながら聞けば理解が行われやすい。それに比べると談話展開的な間違いや不適切な表現は、より大きな単位での問題でもあることから、理解を難しくする。そのため、談話展開的違和感をもつと、言語的な違和感と比較して、わかりにくさに対する評価が厳しくなると考えられる。

４－３　語用論的違和感

（９）から（12）の学習者の発話に対して、［９］から［12］は語用論的違和感を述べている。文法的な間違いではないが、その場における表現の適切性に関する違和感である。

（９）Ｙ：初中級学習者（台湾）・Ｍ：日本人学生

Ｙ１：あ、Ｍ、こんにちは。

Ｍ１：こんにちは。どうしたの、Ｙ。

Ｙ２：そうですね。実はお願いがあるんですけどね。

［９］Ｙ１に対するモニタリング内容

日本人だったら「こんにちは」って言わないなって思うんですけど、Ｙはいつも「こんにちは」って言うので、「こんにちは」って。ちょっと慣れない感じで自分は「こんにちは」って返したかな。「こんにちは」はあんまり言わない。「お疲れ」って言いますね。だから「こんにちは」っていうのはあんまり、久しぶりに会った人とか、目上の方としか、「こんにちは」は、今はあんまり言わないかな。少しちょっと、ぎこちない感じはしました。不自然。

しかし、この発話をした学習者Ｙは、次のようにモニタリングしており、会話の最初にはまずあいさつをすべきであり、そのあいさつはお昼であれば「こんにちは」であるという、日本語の教科書で覚えたことをきちんと自信をもって実行していたようである。

「友だち見て、あいさつした。ＲＰを始める前に、まずあいさつしようって決めていた。」

（10）Ｓ：初中級学習者（台湾）・Ｔ：日本人学生

Ｓ１：おはようございます。

Ｔ１：おはよう。おはようございます、Ｓ（笑）。

Ｓ２：あの、今週の土曜日は時間がありますか。

［10］Ｓ１に対するモニタリング内容

ちょっと、正直なところでいうと、やはりそのあんまりお友達同士で「おはようございます」っていうのは、日本人使わないと思うんですよ。どっちかというと目上の方、あるいはその、他人っていうか。ちょっと、オッと思いました。

しかし、学習者はＳ１の発話に関して次のようにモニタリングしており、出会った時は当然あいさつをする、それが朝なら「おはようございます」だと思っている。人や場所に

よって適切なあいさつの表現を変えなければならないという認識が不足している。

「まず、あいさつしようと思った。」

［９］、[10] のモニタリングは、学習者のあいさつに関する違和感を述べたものである。ロールカードには場所や場面の設定がなされておらず、またどのように会話を始めるかの指示もない。しかし、学習者はまずはあいさつをしており、そのモニタリングを見るとわかるように、会話のはじめにはあいさつが必要だと考えている。話の場所がどこであろうと、相手がだれであろうと、その日の時間を考えて「こんにちは」、「おはようございます」と言おうとしたと考えられる。しかし、あいさつをするということは適切であっても、場面に合わせたあいさつをしなければ、日本人学生に違和感をもたせてしまうことになる。

次の（11）は、会話の終結部である。

（11）Ｙ：中級学習者（インド）・Ａ：日本人学生
　Ａ８：ちょっと 難しいので。（笑い）
　Ｙ９：たぶん、できたら、あの、２時間だけでもいいですけど。できますか。
　Ａ９：２時間だけ。
　Ｙ10：おねがいしまーす。
　Ａ10：じゃ、２時間だけなら代わってもいいですよ。
　Ｙ11：あ、助かった（笑）。どうもありがとうございました。

［11-1］Ｙ10に対するモニタリング内容
　私もアルバイトをしたことがあるので、その経験からいうと「あ、すみません。ありがとうございます」っていうことを最初に言って「よろしくお願いします」と言ったほうがいいのかなって思います。２時間って言われて、ああ、よかったって思って「おねがいしまーす」って、そのまま出た感じがするので、そうですね、なんか私もいろいろアルバイトしたことがあるんですけど、そこで学んだことからいうと、「あ、ありがとうございます」ってお礼を言って、「すみません、お忙しいのに」って言って「よろしくお願いします」って言ったほうが丁寧かなって。失礼というかそういう言葉を入れたほうがより良いと思いました。留学生だから仕方がないという目で見てくれる場合のバイトもあるけど、そこもやっぱり厳しくされるバイトも時にはあるかなあと思いました。

［11-2］Ｙ11に対するモニタリング内容
　さっきと似てるんですけど、「すいません、お忙しい中ありがとうございます」っていう

お礼を丁寧に述べて、「すみません」っていうことも、つけ加えて述べて、言ったほうがいいかなと思いました。あんまりそういうこと言う文化が日本だけなのかもしれないけど、私は日本で生きているので、「すみません」と、ひとこと言った方が自然に思います。

（11）のＹ10とＹ11に対して、日本人学生から厳しいコメントがなされている。日本人学生は依頼される側として、会話の終了のしかたが気になっている。無理をして依頼を引き受けたのだから、感謝や恐縮の気持ちをきちんと示してほしいのである。しかし、以下のＹのモニタリングでわかるように、Ｙは依頼を聞いてもらえてありがたいと喜んでいるだけで、恐縮の気持ちや申し訳ないという気持ちはない。日本人学生からは、Ｙから「すみません」という言葉がないことに不満の気持ちが表されており、両者の事態の把握の仕方に関するずれが、問題として浮かび上がる。

（Ｙ10の発話の意図に関して）「もう困ってる状況なので、お願いしたらたぶんOKしてくれると思った。」
（Ａ10の発話に対して）「思ったとおりOKしてくれてありがたいと思った。」
（Ｙ11の発話の意図に関して）「重要なことをするとき１分も重要でしょう。準備するために２時間もらって本当に本当に楽です。そういう気持ちになった。」

次の（12）に対して、日本人学生は［12］で、学習者から最後に「ありがとうございます」がないため、会話が終結したと感じられないと述べている。

（12）Ｃ：中級学習者（台湾）・MM：日本人学生
　Ｃ８：あ、ほんとー、えー、ありがとう。ほかのなんか行きたくない日があったら、私と交換しようと思うんだけどねー
　MM８：じゃ、そんときはお願いします
　Ｃ９：うん、いいよ、お願いします。

［12］Ｃ９に対するモニタリング内容
「お願いします」うーん。ちょっと、流しちゃったんですけど、うーんと、「お願いします」と言って「お願いします」って言われてしまったんで、なんか、ちょっと、終わった感じがしなかった。会話がこれで終了っていう感じがしなかった。Ｃさんは代わってもらったほうなので、「ありがとうございます」って言ってもらったら、会話が終了になる。

［９］～［12］の語用論的違和感は、会話の開始部と終結部に集中している。特に、会話の終結部は、友人としての会話相手との良好な関係を維持し、今後につなげていくため

に重要な部分であるが、そのスキルが学習者には不足しているといえる。三宅（2014）でも、学習者は会話を上手に終結させるのが難しいということを述べており、日本語の会話ではどのような終わり方をするのが一般的であるか、注目してみていくこと、そしてそれを会話教育に生かしていくことが必要であると考える。

5．まとめ

本研究では、日本人学生と日本語学習者によるRPを取り上げ、日本人学生が学習者のコミュニケーション行動に対して抱く違和感について考察した。違和感を、言語的違和感、談話展開的違和感、語用論的違和感に分けて考察したところ、言語的違和感には、助詞の選択や省略、誤用、フィラーなどに関するものがあり、違和感があっても厳しい評価を下してはいない。学習者だからと容認したり後で指摘しようという配慮もなされており、十全な理解ができなくても、その場その場でとりあえずの解釈をしながら会話をすすめていこうとしていた。

談話的展開的違和感の場合、話し方の順序やかみあい方に違和感を持っていた。相手の意図がうまく理解できずに会話がスムーズに進められないため、困難が生じていることがわかった。そのため、談話展開的違和感をもつと、言語的違和感の場合より、わかりにくさに対する評価がやや厳しくなっていた。

さらに厳しいコメントがあらわれていたのは語用論的違和感である。ここでは会話の開始部と終結部にコメントが集中していたが、日本語社会の規範からずれていると感じたことに関して批判的なコメントがなされている。学習者であっても、社会規範からずれたコミュニケーション行動はなかなか受け入れがたいということが明らかになった。特に、会話の終結部におけるコミュニケーション行動に対する批判は厳しい。学習者自身は、考え得る最善のコミュニケーション行動をとっているつもりだが、それが会話相手である日本語母語話者には違和感を生じさせている。今回の調査では、親しい日本人学生の友人を会話相手として選んでいた。しかし親しい相手であっても評価は厳しかった。このことは、学習者が日常接するさまざまな相手に対して、意図を伝えつつ良好な関係を保っていくためには言語能力、談話展開能力とともに、語用論的能力の向上が強く望まれることを示唆している。

今後は学習者と日本語母語話者の会話におけるモニタリングの調査を続け、日本語母語話者どうしの会話の調査も行う予定である。日本語の会話では、どのような談話展開や語用論的な機能がみられるのか、どのようなモニタリングを行うのか、特に談話の開始部や終結部に注目してみて考察を深め、学習者のコミュニケーション行動と比較したい。その結果を今後の学習者の会話教育に生かしていくことが次の課題となる。

注

１）三宅・フォード丹羽（2014）、三宅（2014）では、日本語初中級学習者に対しRPを実施し、会話遂行時に行っているモニタリングについてフォローアップインタビューを行い、考察した。このRPでは学習者の会話相手は日本語教師が務め、その際、教師の側のモニタリングのデータをとらなかった。本研究では、学習者の会話相手を日本人学生にし、より現実に近い状況を設定して両者からモニタリングのデータをとることにした。

参考文献

猪崎保子（2000a）「『依頼』会話にみられる『優先体系』の文化的相違と期待のずれ―日本人とフランス人日本語学習者の接触場面の研究―」『日本語教育』104号、79-88

猪崎保子（2000b）「接触場面における『依頼』のストラテジー：日本人とフランス人日本語学習者の場合」『世界の日本語教育』第10号、129-145

小池真理（2000）「日本語母語話者が失礼と感じるのは学習者のどんな発話か―「依頼」の場面における母語話者の発話と比較して―」『北海道大学留学生センター紀要』第４号、58-79

徐孟鈴（2006）「依頼会話【終結部】の考察－日本人・台湾人・台湾人上級学習者の接触場面のロールプレイデータを比較して」『言葉と文化』７、67-84、名古屋大学

徐孟鈴（2007）「依頼会話【先行部】の考察―日本語母語場面、台湾人母語場面、日台接触場面のロールプレイデータを比較して」『言葉と文化』８、219-237、名古屋大学

崔文姫（2013）「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価―日本語教師と非日本語教師の因果モデルを中心に―」『国立国語研究所論集』５、1-26

三宅和子・フォード丹羽順子（2014）「日本語学習者の会話遂行時におけるモニタリング行為」『ヨーロッパ日本語教育』18、37-38、ヨーロッパ日本語教師会

三宅和子（2014）「ロールプレイにおける学習者のモニタリングーモニタリングの実態から教育を考えるー」『日本文学文化』第13号、1-16、東洋大学